

得た。

1. 男女比は 9.3 : 1 と男性が圧倒的に多かった。
2. 剖検時の平均年齢は65.0歳(男性64.8歳, 女性66.5歳)であった。症例の年代分布では60歳代(39.9%)が最も多かった。
3. 組織型別症例数では扁平上皮癌が 318例(97.6%)で症例のほとんどを占めていた。
4. 原発部位では声門上部が12例(48.0%)と最も多く, 声門部が11例(44.0%)で, 声門下部は2例(8.0%)と少なかった。原発部位別にみた死亡時の平均年齢は声門上部が60.3歳, 声門部が67.2歳, 声門下部が79.5歳となっていた。
5. 転移については臓器とリンパ節のいずれにも転移の認めた症例は 132例(41.3%), 臓器にのみ転移のあった症例は96例(30.0%)で, リンパ節にのみ転移のみられた症例は20例(6.2%)であった。
6. 悪性喉頭腫瘍と他の臓器との重複癌症例は, 65例(二重癌60例, 三重癌5例)で, その平均年齢は78.4歳と高齢であった。
7. 副病変としては肺炎が最も多く, 肺鬱血および肺水腫, 気管支炎など, とくに呼吸器に関連するものがその大半を占めていた。また頸部血管破裂が22例(6.1%)もみられたことは, 注目すべき所見であった。

質 問: 石 川 富士郎(歯矯正)

1) 同年代における悪性咽頭腫瘍剖検例との比較ではどうですか。

回 答: 佐 藤 方 信(口病理)

1) 死亡時の平均年齢では悪性喉頭腫瘍の56.0才に比較して, 悪性咽頭腫瘍が65.0才と高齢であった。また重複癌の占める割合では悪性咽頭腫瘍では 8.2%に対して, 悪性喉頭腫瘍では17.9%とはるかに高率であった。

質 問: 佐 藤 匡(口生理)

1) 悪性喉頭腫瘍の発生頻度は女性より男性の方が非常に高い値になっていますが, この点についてはどのように解釈すれば良いのでしょうか。

回 答: 村 田 厚(口病理)

石川先生への解答

私どもは1972年~1976年5年間における喉頭癌症例を集計しましたが, これ以前の症例について同じような観点から検索しました成績はありません。

佐藤 (匡) 先生への回答

日本病理剖検輯報にはその性別発生頻度を示唆するような事に関しては記載されておりません。従来の報

告では喉頭癌は男性の疾患であるといわれ, その理由については不明であります。喉頭癌発生には習慣, 嗜好, 職業などとの諸因子について多数論じられています。

### 演題3 人舌筋にみられた Lipofuscin の病理学的検討

・佐 藤 方 信, 畠 山 節 子, 鈴 木 鍾 美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

Lipofuscin (Lfc) は人体の種々の器管と組織で見出されているが, 口腔領域の筋についてこれを検索した報告はこれまで本邦ではみられない。そこで我々は比較的運動量にとむ舌筋について Lfc を検索したのでその結果を報告した。

〔材料・方法〕 本学医学部第一病理および歯学部口腔病理学教室にて剖検した89例の舌を用い, それぞれ舌尖部, 舌体部, 舌根部を前額断として切り出した。標本はパラフィン切片とし, H.E., PAS, Massom Fontana, Sudan Black B および Ziehl-Neelsen 染色などを施して検索したほか, 未染の標本を用いて螢光顕微鏡にても観察した。Lfc の舌各部位における沈着度は Dayan ら<sup>1)</sup>の基準に従い, group I, group 2, group 3 の3群に分けた。また各症例における Lfc 沈着程度の総合的判定は切り出した3部位のうち, 2部位以上で示した Dayan ら<sup>1)</sup>の基準をこれにあて, それぞれ Group I, Group II, Group III とした。

〔成績〕 1. 検索した89例のうち72例(80.9%)の症例で Lfc の沈着がみられた。

2. Lfc の沈着度別に症例をみると Group I が9例(12.5%), Group II が45例(62.5%), Group III が18例(25.0%)であった。

3. 若年層ではGroup I に属する症例が多く, 年齢を増すに従ってGroup II がこれに代り, 高年齢層ではGroup III に属する症例が多くなっていた。

4. Lfc 沈着程度群別の平均年齢は Group I が33.7 ± 9.4才, Group II が63.3 ± 10.1才, Group III が73.1 ± 9.8才であった。いずれの Group 間にも有意の差がみられた ( $P < 0.001$ )。

5. Lfc の沈着度を舌の部位別にみた場合, 舌尖, 舌体, 舌根のいずれの部位にも等しく沈着していた症例が25例(37.5%)で最も多かった。

## 文 献

1) Dan Dayan, Raffaele David and Amos Buchner: Lipofuscin in human tongue muscle, *Journal of Oral Pathology*, 8: 121-125, 1979.

質 問: 鈴木 隆 (口生理)

1) Lipofuscin の化学的性状の特徴

2) Lipofuscin 沈着の病理的意義をお教え下さい。

質 問: 石川 富士郎 (歯矯正)

ご研究の中で、舌の尖、体および根の3つの部分に分けて Lipofuscin の量をお調べにより、他方全体的に高年齢になるにおいてその量が多いとのことですが、それでは、これら両者間での特徴はないのですか。

回 答: 佐藤 方信 (口病理)

鈴木先生への回答

リポフスチンは脂質に関係するものとして Hueck により名づけられ、これまで人体の種々の器官および組織で検索され、加齢とともにその量が増加するといわれている。またこれは水はもちろん、一般の有機溶剤、過酸化水素、過マンガン酸カリ溶液、薄い酸、アルカリなどに不溶で紫外線で黄色の螢光を発生し、PAS 染色で赤紫、Masson Fontana 染色および Sudan Black 染色で黒色に染色される。鉄反応は陰性である。

石川先生への回答

加齢にともなうリポフスチンの増加は舌内での分布に関して特別の傾向はみられない。

#### 演題4 反対咬合症例の被蓋改善後の顎顔面の変化に関する研究

・近野 茂安, 中野 廣一, 八木 實  
三浦 廣行, 亀谷 哲也, 石川 富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

反対咬合の治療では、単に前歯逆被蓋の改善をするだけでなく、その後も顎顔面の成長過程を長期に亘って観察してゆく必要がある。今回演者らは反対咬合症例の被蓋改善後における顎顔面形態の変化について、その被蓋改善の時期と顎態 (skeletal relationship) の違いから検討した。

資料: 岩手医科大学歯学部附属病院矯正歯科で治療を行った反対咬合症例のうち、前歯被蓋の改善を混合歯咬合前期で行ったもの52例、後期で改善させたもの33

例を用いた。これら症例の被蓋改善前とその後の歯・顎・顔面頭蓋の累年の変化について、頭部X線規格写真から検討した。また顎態については、 $\angle ANB > 0$  を skeletal I 群、 $\angle ANB \leq 0$  を skeletal III 群とした。成績: skeletal I 群においては上顎の前方発育は良好であった。下顎は被蓋改善時後退し、その後混合歯咬合前期に被蓋改善がされたものは、下顎は下方へと変化した。また後期において改善したものは、被蓋の改善後に下顎は前方よりも後方へと移動した。被蓋改善時、上顎切歯は唇側に、下顎切歯は舌側に傾斜して、その後における変化は殆んど認められない。skeletal III 群では、上顎の発育は skeletal I 群と比べて劣っていたが、混合歯咬合前期で被蓋改善を行ったものでは、改善時に若干の前方成長が期待できた。下顎は改善時、一旦後方に移動し、その後は累年的に前方位をとっていた。また改善時、上顎切歯軸は唇側に、下顎のそれは舌側に強く傾斜したが、その後はあまり変化していない。一方、後期に被蓋改善を行ったものでは、下顎の後方移動量は極めて少なく、被蓋改善の機転は前歯歯軸の傾斜におおむね大きい。その後、下顎の前方への成長に伴って、上顎切歯の唇側傾斜と下顎前歯の舌側傾斜が強まっていた。

まとめ: 上顎の発育不全 (劣成長) を疑わせる反対咬合の症例では、積極的な上顎の成長誘導を早期から一貫した咬合管理下のもとで、進めなければならないと考えられた。

追 加: 石川 富士郎 (歯矯正)

非常に治療対象として多い反対咬合において前歯逆被蓋が改善した後の顎態の変化を極めて長期間に亘って経過観察して得たものです。これも開科して15周年になってこそ報告できることです。本研究をととして臨床的指針としては反対咬合例で上顎の劣成長をもつものではこれを早期に矯正治療を行うべきであり、上顎の劣成長と下顎の成長による Skeletal III のものでは例え前歯被蓋が改善していてもその主な変化は上下前歯軸の改善によって得られているものであることを知っておきたい。

#### 演題5 矢巾地区、昭和55年度就学時の歯科健康診断について

・湯山 幸寛, 本田 和雄, 亀谷 哲也  
石川 富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座